

伝統染織を考える

—Gパンに藍をこめての考察—

渡辺孝子

On the Studies of Tredional Dyeing and Weaving

—Feeling Affection for Jeans—

by

Takako Watanabe

はじめに

70年代のファッションを語るに、ジーンズは見逃す事のできない存在である。ただあまりにも私達の普段の生活に浸透し切ってしまった為、毎日、無造作に履きすて、空気のようにその存在を忘れてしまっている事が多い。改めてジーンズについて考える気になったのは、52年6月の朝日新聞夕刊に掲載の「ジーンズの生産急増の為に藍染の染料が不足し、同じ藍染染料を使用している浴衣地の染色が困難になり、その染料の争奪により、染料価格が高騰した結果、浴衣地の価格を値上げせざるを得なくなった。」という記事を見た時だった。

尤この記事は、浴衣地値上げの為に言い分けの感が強く、藍染々料の高騰はその2年前にあり、昭和52年にはむしろ染料価格は安定しつつあったはずである。しかし、興味を持たれるのは、日本人に昔から親しまれていた藍の色が、生活様式の変化に伴い、衣料様式も大きく変わっているにもかかわらず、形を変えてが今日でも根強く愛されている事である。

勿論、藍色であるという理由だけで、ジーンズが流行したとは考えない。そこで、私達にとってジーンズとは何か、及び、ジーンズと藍染との関係について調べてみた。

ジーンズのおいたちと木綿

ジーンズについて各辞典等の説明をまとめると、「デニムの、または作業用のズボンを言い、仁斯とも書く。地合いは厚手で、未晒のもの、晒、染色、捺染したものなどがある。用途は非常に広く、おもに木綿服地、作業衣、ズック靴、寝具類など。」ということになる。

デニムとは、フランス語のセルジ・デ・ニーム（ニー

ムのサージ)の意味で、フランスのニームという町の織物センターで古くより織られていた綾織物がその原型であるといわれる。このデニムの歴史は古く、15世紀末、コロンブスが新大陸発見の航海で使った、サンタ・マリア号の帆に使われたと伝えられており、その後、米国では19世紀中葉のゴールドラッシュ時代、幌馬車の幌や、パンツにデニムが使われた。当時、アメリカ西部の街で小間物の行商を営む、ドイツから移民してきた青年(リーバイ・ストラウス)が、デニムを利用し、要所々に馬の蹄の金具(バーベット)を打ち込んだズボン、つまりジーンズを考え、売り出した。元来は天然藍で染められたものであったが、現在では全て化学染料が用いられている。ジーパンとは日本名である。

彼は「コココーラとGM(自動車)と並んで米国が作りだした“米国”の一つ」と言われ、リーバイ労働者向け衣類を製造販売し、10億ドル近い売り上げをするリーバイ・ストラウス社の創業者である。同社は世界最古、最大のジーンズ・メーカーである。

また、ジーンズの魅力の一つは、デニムの素材である木綿の魅力によるものが大きい。

木綿が人類にもたらした影響はかなりなものであり、最近では天然繊維ブームの中でも最も人気のある素材となっている。

木綿最古の資料はパキスタンのモヘンジョダロの遺跡で発掘されたもので、BC1800~2500年頃のものといわれているが、品種はアフリカ系の種類のものであり、インドで木綿の栽培が盛んになるのもこの頃からと推定される。

時代は下って、細い糸による精巧な木綿を織り出す技術が進み、インドのダッカ地方に産したモスリンは有名である。これらの木綿は、アラビア商人達によりヨーロ

ッパへ伝えられた。それまでは夏でも厚ぼったい毛織物を着る事しか知らなかったヨーロッパの人々に、木綿は珍らしいものに見えたらしく、ヘロドトスは『歴史』に「木になる羊毛」と表現している。また当時の別の書によると、この木綿を着た人が「まるで何も着ていないように見えた」とあるが、だまされた王様が世界一薄い着物を着ていると思ひ込んで裸で町を歩いたという童話に表われた当時の薄い着物に対する人々のあこがれがうかがえる。

一方、新大陸ではB・C1000年頃と思われるペルー木綿が遺跡から発掘されている。

我が国に木綿が入ったのは奈良朝頃で、製品として入っているが、やはり非常に珍らしいものとされていたらしく白畳と名付けられている。このことからみて、当時、中国でも貴重品であったと思われる。

日本で綿の栽培が本格的に始まったのは室町時代以降であり、江戸時代には町民の流通商品となって、広く庶民に愛好されるようになった。

現在、世界での主な綿の産地は、アメリカ合衆国、ラテンアメリカ、ブラジル、インド、中国、エジプトである。

藍 染 と は

合成染料の出現によって、天然藍の事業は一挙に衰えたが、古代から19世紀前半まで使用されていた染料は天然染料であり、藍と茜である。そしてオーストラリアを除く全世界に於て、藍を利用したことは明白である。アジアに於ては、特に南部と東部の古代文明の存した地方では、藍の染色が盛んだった。また、インドシナやインドネシアでは技術面で原始的だった多くの種族間でも藍染は行われていた。アフリカでは地中海沿岸地方からスーダンを経てギニア沿岸に至る原始種族に於てさえ、藍染色の跡を見ることが出来る。コロンブスの時代には、アンデスやメキシコに住んでいた文化民族間にその徴証を見ることが出来る。ナジョインディアン（アリゾナ及びニュー・メキシコ）それにリオ・ネグロ（アマゾン）は今日に至るまで藍染を行っている。

これらにはるか遠い時代、各地域で発祥した事は間違いないが、現在ではその起源を断言する域には未だ達していない。というのは以上の事項に関する研究調査は極めて僅少である理由からである。

いずれにしても藍は長い間、広く、多くの人々にとって欠かせない染料であった。その理由として考えられる事は、日光や洗濯に極めて丈夫であり、また木綿の場合など、染めない白のままのものに比べて、摩擦に対して

10%ほど強度が増すという実用性と、主として労働服（野良着）として最も広く利用されていたということ、毒蛇よけになると考えられていた。また仮に、毒蛇に刺された時、血清療法がなかった昔は、藍もしくは藍染のものの汁を使うことが一番利用しやすい方法であったという。

古代エジプトに於ては、ミイラを包む亜麻布を藍で染色したものが発見されている。アメリカでは、ジーンズに藍染の歴史がある。

日本へは、藍は奈良朝以前にすでに渡来していたと思われる。平安時代には京都の旧賀茂川と高野川の合流地である九条付近の湿田で栽培されていたことが東寺収蔵の『百合文書』にみられ、大正時代まで栽培が続いていた。徳川時代、阿波の吉野川流域では水害が多く米作に適さないので藩は換金作物として藍栽培を奨励した。藩の厳しい統制のもとに、全国でも有名な産地になった。

我が国の精藍事業は、かなり優れたものであり、その盛んだった頃より、数々の秘伝書、あるいは、歴史や染色方法などについての文献が残されている。

浅学の私の知識による藍染技術の具体的記述は機会を改めてする事にし、今回は、阿波精藍事業に関する主要文献を提示するに止めておく。

『阿波藍栽培法伝授書』 上巻 下巻

『阿州産藍之説』

『藍染印入法被集成』

『染ものいろいろ藍出し方伝法書』

『出藍直秘伝』

『藍の応用附紺色下染法』 1891

『藍の醱酵建独案内』 服部嘉兵衛著 1941

『阿波藍沿革史』 西野嘉右衛門 1940

『阿波藍譜』Ⅰ 三木与吉郎 1960 三木産業

『阿波藍譜』Ⅱ 三木与吉郎 1963 三木産業

『阿波藍譜外篇』 三木与吉郎 1964 三木産業

『天半藍色』 三木与吉郎 1974 三木産業

季刊『染織と生活』 No.10 1975—5

季刊『染織と生活』 No.13 1976—6

前にも述べたように、藍に限らず、天然染料は、1856年イギリスで世界初の合成染料「モーブ」が発見されて以来、ドイツ・フランスなどで次々と合成染料の開発に成功し、染料としての地位を半世紀も経たないうちに合染に譲ってしまった。1880年にドイツのアドルフ・フォン・バイヤーが、天然藍のインディゴと同じ構造式を持つインディゴ・ピユアーの合成に成功し、インドの藍農園は荒廃した。

日本では、明治36年（1901）をピークに阿波藍は減産

しはじめ、以後加速度的に低下していった。

現在、日本で行われている天然藍による藍染は、沖縄の琉球藍と、徳島の阿波藍によるものがほとんどであるが、藍の葉から染を作る事業を守る人は、徳島に6人だけとなり、いずれも高齢な方々であり、後継者の育生の為、徳島県ではそのうち4人を県の重要文化財に指定した。しかし、そのうちの2人は後継者を持つに至っていない。この他は、国の重要無形文化財となった千葉あやの女史による、藍の栽培から染色に至るまで、一貫して一人で行っている珍しい例のみである。

今、徳島で6人の染師の手により、年間、50t前後生産されている染は、大島紬、久留米紬、弓浜紬、阿波しじら、その他伝統染織の各産地の紺屋で藍染されているが、そのうちの全てが天然藍のみで染色されているとは限らず、合成染料(インディゴ・ピュアー)との割り建ての所もある。

しかし、世界中で、今でも藍染の行われている所は、中米とアジアの極一部の開発途上国であり、それらの国々でも、急速に合成染料が流入している状態で、中でも日本は例外的に天然染料の生き延びている国である。

この事からして、今、藍色に染められている木綿生地殆んどは、インディゴ・ピュアーの建て染めであり、ジーンズは最も代表的な品目と言える。

表1 昭和50年度阿波藍・染出荷量

県名	出荷量(Kg)	産業	県名	出荷量(Kg)	産業
鹿児島	4,020	大島紬	愛知	300	有松しぼり
福岡	3,780	久留米紬	静岡	600	
島根	300		群馬	180	
鳥取	300	弓浜紬	茨城	120	結城紬
兵庫	900		栃木	600	結城紬
志賀	120		東京	300	
京都	1,320	友禅	埼玉	1,500	村山大島紬
富山	600		千葉	1,800	
岐阜	960	郡上紬	徳島	14,760	阿波しじら 阿波友禅
長野	120				

図1 インディゴの構造と酸化・環元の式

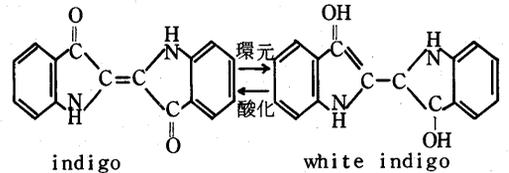
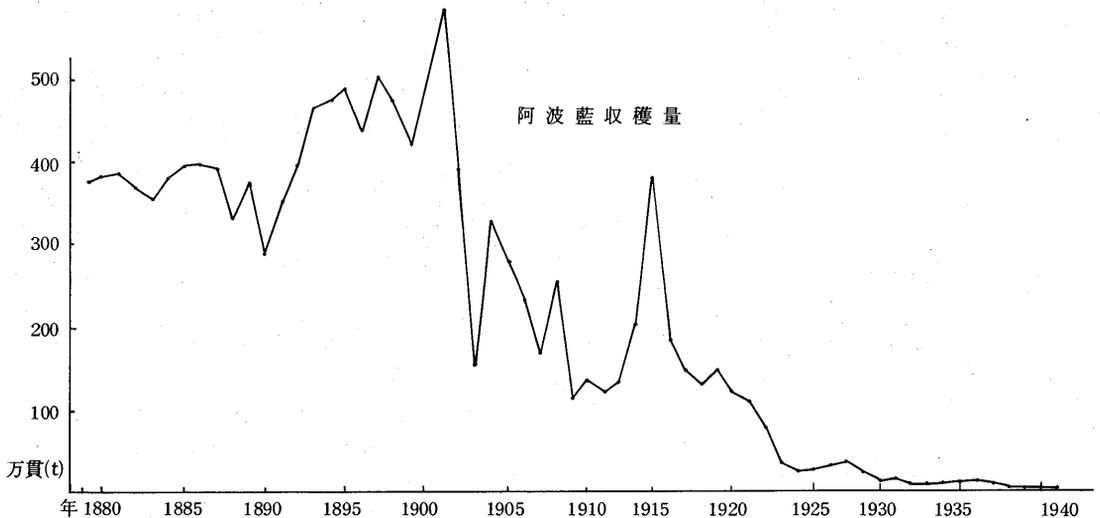


図2 藍の収穫量



ジーンズの藍染と生産状況

日本でのジーンズの染色は、広島県の福山周辺が最も有力な産地である。次に、岡山県・徳島県・その他(いずれもかつての織物産地)などで行っている。

戦後、アメリカの放出による中古衣料のジーンズパン

ツがアメ横などで人気を呼び、これが刺激となって、福山地方では、昭和28年には全国デニム生産量の80%を占める産地となり、備後織物の歴史を生かし、現在の下地を作った。

日本での昭和27年頃からの第一次デニムブームは昭和33・34年頃で終わり、生産は減少したが、ジーンズの本

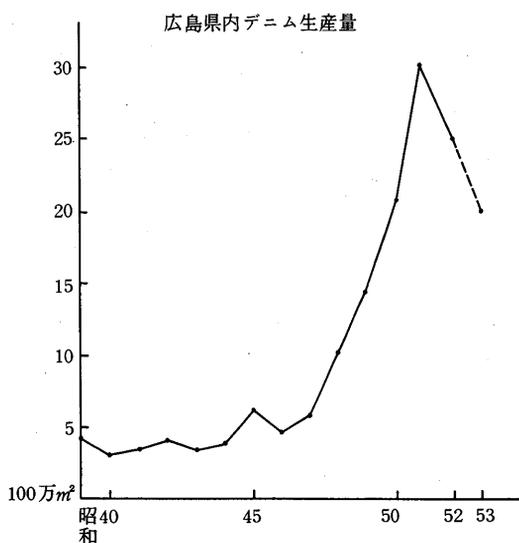
場アメリカでは、昭和35年（1960）頃から、ジーンズ革命といわれるほどのブームが起こった。日本では、昭和45年頃からヤングファッション商品として普及し始め、昭和47年頃には爆発的なジーンズブームが到来した。かねてから、特産デニムの開発を手掛けて来ていた福山地方の染色業者は、この頃、連続染色方式の開発に成功した。

それ以前には、染色は手仕事に頼らなければならなかったが、連続染色機の導入は、作業工程、人件費共に、大巾に縮約する事ができ、爆発的なブームと重って、驚異的なよい生産成績を上げた。

具体的には、従来の認染方式によるデニム生産では、出荷まで費やす作業を工程別に数えると、22あり、年間300万 m^2 のデニム生産に必要な作業員は120人。製造日数は50日を必要としたのに比べ、新方式では、作業工程9。作業員30人。製造日数10日という事から見ても、爆発的なブームに充分その威力を発揮した訳である。また、従来の認染め方式では、糸の中心にまで染料が入り込み、アメリカ製のジーンズの洗いざらした風合いが求められなかったが、新方式による染色はこの問題をも解決し、アメリカ製デニムを上まわる質品になり、現在では逆に合衆国からの輸入が要請されている。

しかし、昭和50年には生産過上により、多数の在庫をかかえ、昭和52年から減産に転じ、昭和53年現在では中小の染色業者は操業休止状態の染色工場が多い。

図3 広島県内デニム生産量



ブーム

繊維業界では、“ジーンズブームは去った。”と評価し

ている。確かに、生産面から見れば、成長を期待される商品ではなくなった。しかし、ジーンズを履いている消費者は、業界がブームと呼ぶ時期に比べて本当に減っているのだろうか。

流行の定義は「ある特殊な文化形態、または生活様式などが急激に広まり、一定期間それが続くこと。」であるが、ミニなどその他のファッションの流行と比べると、ジーンズは異った点がある。

まず、資本主義の経済機構のもとでは、流行は必要欠くべからざるものである。言い換えれば、流行は経済維持の為にデザイナー達が毎年、あるいは数年おきにデザインを作り変え、それを消費者が受け入れるのがならわしとされている。流行の最も特色とするところは、その急激な伝播性と一時性にある。流行の流行たるゆえんは、急に広まり短期間の中に終るところにあると言える。流行が一般大衆の生活に深く根を下ろし永くその生命をつづけるような持続性のある場合は、いわば伝統化されたと言える。

また流行は、心理学的に言うとも、必ず、個別性と同調性との両面を持っている。前者は流行の先端を行く者であり、後者は最大多数に追従する者である。後者が流行に参加した時には、前者は既に、次の流行に向かっていると言える。それは、流行とは新鮮さが美を決定する大きな基準となっている為である。だから、流行は日常的でないもの、例えば外国文化や、古い時代のもなどから取り入れられる事が多い。

このように、流行においては、美の基準は移り変わるものであるが、時を経ても新鮮さを失わないものを古典と呼び、それが真の美である。ジーンズをそう呼んでも言いすぎではないかもしれない。

当初、個性派ファッションと言われたジーンズも今や没個性と言われ、流行を意識しなくなったが、個別性を主とするファッションリーダー達は、もうジーンズを振り向こうとしないだろうか。むしろ、今だに履き続けている者が彼等である。

ジーンズの売れ行きが落ちたのは、流行が下火になった為というよりも、人口構成に関係あるのではないだろうか。

国勢調査の年齢別人口、昭和45年と昭和51年推計を基に、昭和46年当時の年齢別人口と昭和52年の年齢別人口を割り出すと、ジーンズの消費年齢は10才～34才と考えられているがそのうち、最も所有率の高い15才～24才とは、昭和46年に於てはベビーブームの人口層にあたる。昭和52年の同年令別人口は、その8割程度しかない。この事から見て、一人々々の購入枚数に変わりがなくても、

消費量の方は当然、2割は下るわけである。

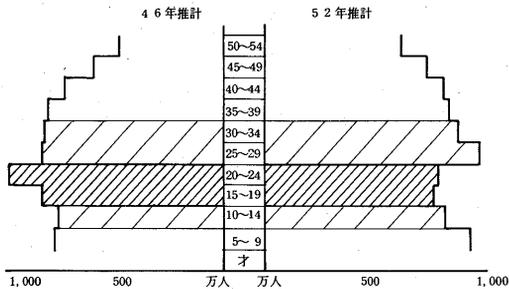
また、ジーンズブームは爆発的だったにもかかわらず、他の爆発的ブームのものとは違う点は、ピークを過ぎても急激にその人気は衰えない事である。

ジーンズをはく事は没個性と言われながら、いつまでも流行遅れの衣料に見えないのは勿論のこと、「Gパンが似合う」という言葉は、言われて気分の悪いものではなく、特に年寄りほど喜ぶ。ジーンズは若さの証徴でもあるから。

このブームによって、ジーンズ人口は大巾に拡大し、定着もした。(1977年繊維年鑑によると「ここにきて、ジーンズブームは定着した」とある)

今後、ジーンズの消費量は徐々に下降してゆくにちがいないが、人々から忘れられる事は考えられない。私達の精神構造が変化しないかぎり。

図4 年令別人口



結 論

昭和53年9月現在。国内のジーンズショップで売られているジーンズの中に、天然藍で染められているブルージーンズは言うまでもなく一本もない。また、消費者にとってそんな事は関心もなく、天然藍で染める必要性を感じた事もないであろう。仮に関心があったとしても、藍が毒蛇、毒虫よけになるからといって、今ジーンズを愛用している人達のうち、蛇に脅やかされる生活をしている人は何人いるだろうか。また、田舎に住むお年寄りの方のうちには、冷えないようにと藍染めの下着を着けているという人もあるが、ほんとうにその必要性はどのくらいなのだろうか。

ただ、日本人の藍色に対する執着は甚だ強く、ヨーロッパに比べると、ジーンズが世界的なブームとは言っても、パリで見かけるジーンズ姿の若者はアメリカ人と日本人が多く、またよく着こなしているのも彼等である。

それに、パリのジーンズショップは、かなりヨーロッパアンナイズされているところは、さすがにモードの街ではあるが、マロニエの並木道には、ブルージーンより、

コーデュロイの方が似合う。

日本で藍色が常に庶民の衣料の色とされている理由は、似合うからにほかならない。黄色い肌と霞んだ風景は昔から今日まで、将来もずっと変わらない、藍の映える条件である。

ヨーロッパの人々のように、自分達の古い物をあまり大切にしようとしめない日本人だが、一昔前からの民芸ブームや、伝統工芸コンプレックス等のうちには、近代科学の恩恵に与りながら、それを憂うる向きも一部にある。しかし、実際には、伝統工芸こそ、科学技術の介入が待たれている分野なのである。

これまででは、伝統と名の付くものはみな、名人や工芸家に任せたままであった。藍染に関しても例外ではなく、その科学的データは乏しく、本格的に扱ったものはないと言える。

一方、合成染料の開発、発展は目ざましく見えるが、天然染料の全てが薬用として人体に悪影響のないものなのに、合成染料の多くは毒物であり、恐しい公害の原因となっている。その為に、最近、製造禁止になった染料もあるが、幸いインディゴ・ピユアーの毒性は問題にされてはいない。しかし、毒害を懸念しながら使用する染料より、安心して使用できる染料の方が良いにきまっている。

やっと公害の面に気が付いた現在、待たれるのは天然染料の工業化である。

今、徳島の阿波藍の事業の先行きの見通しは暗い。しかし、精藍に携わる人々の誇りと情熱とによって守り続けられてきた。

このすばらしい技術を失わない為に、ほんとうの美に近づく為に、私達は、謙虚な努力をしてゆかなければならない。

なお、本稿作成にあたり、貴重な時間を割いて、御指導、御協力をして下さった関係各所の方々に深く感謝致します。

文 献

- 『現代衣料事典』 (株)洋品会 1977
- 『服飾事典』 田中千代 同文書院 1969
- 『服装 — その美学的考察 —』 六波羅久男 和光出版 1974
- 『天然染料の研究』 吉岡常雄 光村推古書院 1974
- 『合成染料』 横手正夫・芝宮福松 日刊工業新聞社 1978
- 『染色学』 奥山春彦・水梨サワ子 相川書房 1976
- 『繊維年鑑』 日本繊維新聞社 1977

- 『繊維学会誌』 1977-12
- 『繊維科学』 日本繊維センター 1977
- 『現代繊維化学』 安田武 広川書店 1966
- 『阿波藍に関する諸統計』 三木与吉郎 三木産業(株)
1961
- 『広島県立福山繊維工業試験場資料』 1978
- 『広島県繊維工業産地診断報告書』 広島県福山地方商
工事務所 1976
- 『創立70周年記念誌』 広島県立福山繊維工業試験場
1977
- 『徳島県立工業試験場資料』
- 『三木文庫資料』
- 第27回『日本統計年鑑』 総理府統計局 1977
- 『季刊・染織と生活』 No.10 染織と生活社
1975
- 『 “ ” 』 No.13 “ ”
1976
- 『 “ ” 』 No.15 “ ”
1976
- 『 “ ” 』 No.20 “ ”
1978